日文研―日本研究と国際交流の中心

アヌ・ジンダル

ある一人の人生には消し難い徴を残す経験がある。国際日本文化研究センターの外国人研究員としての一年間（二〇〇九～二〇一〇年）はそんなひとつだ。その期間、私は模範的な学術的な仕事をやり遂げることができた。初めて日文研を訪れたのは国際交流基金を得て京都の同志社大学で学んでいた一九九九年のことだった。その時には設備に非常に深く印象づけられ、いつかここに戻って研究を続けられたらと望んだことを覚えている。

二〇〇九年二月末、日文研に到着した時にはしんしんと降る雪が迎えてくれた。今でも忘れないのが、コモンルームから見渡せる静かな中庭の桃の木に雪が舞う光景だ。スタッフが非常に手際よく私を研究室と、所内に作られた非常に心地よい日文研ハウスの部屋に案内し、荷ほどきさせてくれた。どちらも必要な設備がすべて整っており、よくしつらえてある。客員の研究者としてある限りの設備を使って仕事を能率よく進めることができたほか、快適な滞在を可能にする実務面にもずいぶん配慮してもらった。

日文研は国際級の設備と非常に高い水準の環境を誇り、理想的な学術空間を最大限作り出すように作られ、調査や研究に没頭し集中できる。国際協力・共同研究がその中心活動にあり、世界中の学者のるつぼとして議論や発表を行い、日本研究に関連する多様なテーマに各方面からのアプローチや視点を展開している。月例のセミナーでは日文研の教員と客員との間で楽し

いネットワークが築かれ、国際セミナー、発表、講演、催しが目白押しで、模範的学術活動に磨きをかけるようなダイナミックで活発な雰囲気が生まれている。図書館は書籍、雑誌、資料、データベースが驚くほど所蔵され、興味の湧く円形構造で頭上にステンドグラスを備えた研究向けの静謐な場所を作り出し、自由にコピーとスキャンができる。私はこの安息場に何時間も幸せにすごし、日本美術・建築・デザインの多くの分野にわたる貴重な資料を読み集めた。

美しい建物と敷地と庭が牧歌的に設計され、丘の麓に広がっている。桜並木が正門まで植えられ春には一斉に花が咲く。しだれ桜がカーブを描いた階段にあって濃いピンクの花を見せつける。ある冬のしとしと雨のなか、夜の一一時に研究室からハウスに帰ろうとすると、庭で灰色のウサギが庭で楽しそうに草を食んでいるではないか。折々気ままな集まりが庭で開かれ、誰もが国の食べ物を持ち寄るような雰囲気のなかでくつろぎのんびりできた。ある集まりでは狸のような動物が仲間に加わろうとしてきたが、彼は私たちと安全な距離を取るのを好んだ。

日文研の素晴らしいスタッフは支援と援助を惜しまず、私の研究と私生活のすべての面が円滑に進むよう最大限の気遣いをしてくれた。特に三ヶ月間家族が合流している間にはお世話になった。娘のアサワリは桂坂小学校に入学し、日々の宿題や学校との交渉はスタッフが手伝ってくれた。家族がいる間は仕事と家族の素敵な両立生活があったが、彼らがニューデリーに帰ると毎晩一一時近く、守衛さんがおやすみなさいを言いに来るまで研究室で働きづめとなった。ハウスの部屋にもどると夜中の二時までラップトップで仕事をした。これはすべて最高の仕事環境と条件のおかげである。

私の研究テーマは浮世絵で、日文研図書館に膨大な資料があるのを発見した。受け入れ教官の早川先生は浮世絵について非常に広範な知識をお持ちで私を優しく手伝ってくれた。そして

親切なことに日文研の特別資料の浮世絵を見せてくれた。それほど間近にオリジナルを見ることができたのは、特別な配慮があったからである。日文研には客員教員に特別で寛容な待遇があり、東京へ数多くの画廊（多くは浮世絵専門）を訪問しに出かけた。早川先生の推薦と指導で慶応大学で開催された国際浮世絵学会で発表することができた。そして日文研イブニング・セミナーの発表で私の研究は頂点に達した。

国内外で日文研はシンポジウムを毎年開催する。宇野先生のご招待で、「アジア新時代の南アジアにおける日本像―インド・ＳＡＡＲＣ諸国における日本研究の現状と必要性」と題された二〇〇九年の日文研海外シンポジウムに参加できた。偶然にも私の国で開かれ、一行とニューデリーを旅行した。新しい領域を掘り下げ、新鮮な発想を提供する論文が日文研やその他の国の教員によって発表された。私の論文は「日本とインドにおける現代美術の交流と傾向」と題し、日印の文化交流についての深い関心や両国の美術界のアウトプットの比較を扱った。

京都生活はユニークで最上級の経験だ。古都として京都は美しい寺院、美術品、文化イベント、季節ごとに変わる素晴らしい風景に恵まれている。春の桜や秋の紅葉あり、金閣寺、竜安寺、今出川の御所あり、二条城、鴨川、哲学の道、嵐山あり。数えきれない経験、風景、光景を短くまとめることは難しい。近くの奈良には重厚な東大寺があり、町中をわが物顔で歩きまわる鹿が人なつこく寄ってきて手先の食べ物を食べていく。コスモポリタンの大都市大阪も近い。東京へは新幹線でわずか数時間だ。

加茂川会は非常に親切に京都で暮らす外国人のために素晴らしいプログラムを提供してくれる。竹林公園や磁器の工場や花見などに参加した。大八木さんの一家はとりわけ親切で、親友となって何度も私を美しいお家へ招いてくれた。創価学会のグループも多くの集まりに招いて

くれたし、葉山さんの一家は私の九歳になる娘の小学校入学の手続きを特に手伝ってくれた。

ニューデリーに帰った後も日本美術・文化についての研究を続け、日本の視覚芸術と現代表現・デザインに関してインド国際センター、インド・ハビタット・センターで発表した。「浮世絵礼賛」「もみじに魅せられて」のような私の展覧会は、日文研滞在や日本研究との関わりからきっかけを得た。

インドでは日本研究はますます人気を高めている。いくつかの大学は日本語、文学、歴史、国際関係論の卒業コースを持っている。日本語のコースは多くのインドの学校で六学年から上で開かれている。毎年数名の学生が文科省奨学金で日本滞在をおこなっている。インドの文科省のオフィスは学生のための日本語スピーチ・コンテストを定期開催している。アスラーニ大使によって設立された日印パートナーシップ・フォーラムが両国民の友好関係を深めるのに専心している。日本大使館の外部団体であり日本文化情報センターは日本語クラスと文化プログラムを主催していたが、今では国際交流基金のニューデリー事務所が日本語と文化への高まる関心の一番の刺激剤として機能し、つねに日本の文化プログラム、ワークショップ、映画上映、アート展を開催している。

日文研の教員とスタッフは私の非常な助けとなり、温かく寛容に迎えてくれた。ここで深い感謝の念を表したい。二〇一七年、日文研が三〇周年を迎えるという。この祝賀の機会に際してすべての教員とスタッフの皆さんにお祝いの言葉を送ります。おめでとうございます。

（国際日本文化研究センター元外国人研究員）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）